

第一章 紫の上の物語 死期間近き春から夏の話

[第一段 紫の上、出家を願うが許されず]

*紫の上、いたうわづらひたまひし御心地の後、いと篤しくなりたまひて、そこはかたなく悩みわたりたまふこと久しくなりぬ(紫の上は四年命に大病を患いなさった後で、とても病弱にお成りになって、日頃からお元気でないままが続いています)。 *注に<四年前の正月の女楽の直後発病し、四月危篤状態まで陥ったが(若菜下)、その後全快せず今日にいたっている。冒頭「紫の上」、と女主人公を提示し、以下にも体言の下に格助詞や係助詞を伴わない、物語としての文章の生動に注意べき。>とある。

いとおどろおどろしうはあらねど(ひどく重い病態ではないが)、年月重なれば(何年と長引いているので)、頼もしげなく(心配で)、いとどあえかになりまさりたまへるを(上がとてもやせ細るばかりでいらっしゃるのを)、院の思ほし嘆くこと、限りなし(六条院源氏殿がお悲しみなさる事この上ありません)。

*しばしにても後れきこえたまはむことをば(殿は上に少しでも死に遅れ申しなさるのを)、いみじかるべく思し(どうしても避けたくお思いになり)、*みづからの御心地には(その当の紫の上ご自身は)、この世に飽かぬことなく(この世に思い残しもなく)、うしろめたきほだしだにまじらぬ御身なれば(心配な幼子を抱える身でもない)、あながちにかけとどめまほしき御命とも思されぬを(特に未練を惜しむ命ともお思いでいらっしゃらないが)、*年ごろの御契りかけ離れ(死別によって長年の夫婦の縁が切れることを)、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ(源氏殿に思わせて悲しませ申し上げるであろう事だけが)、人知れぬ御心のうちにも(御内心で)、ものあはれに思されける(感慨深く思われなさいます)。 *「しばしにても」は注に<以下「いみじかるべく思し」まで、源氏の心中を地の文で語る。>とある。上にも殿にも同じような敬語遣いなので、主語は文意から当てるようなことになってしまい、分かり難い。で、是は文意からして、殿が主語らしいとは思ふ。 *「みづからの御心地には」は注に<以下、紫の上の心中を地の文で語る。>とある。この「みづからの」は<その当の相手自身の>という言い方になりそうだが、しかし、是もそう簡単に主語が特定できず、何度か読み直して、やはり文意から納得したが、本当に主語省略は紛らわしい。 *「年ごろの御契りかけ離れ」は注に<『集成』は「死別によって今生の契りを断つこと」。『完訳』は「源氏との年来の縁。「契り」に注意。単なる「仲」でない。子への執着がない代りに、源氏との宿縁の仲が現世の絆となっている」と注す。>とある。「契りかけ離る」が<死別>を意味する、というのは、言われてみれば分かるような気がするし、此処の文意については左様納得する。ものの、その実、分かったような分からないような、分からないことだから反論も出来ないみたいな所もあって、縁も何も、死んでしまえば、それこそ何も無くなる、死んだ人本人には現世が意味を失くす、というのは、多分そうだろうなあ、とは思ふが、種の継続は現世代の卵子と精子との結合で実体化する次世代個体が次現世代へと成長することによって、更にそれが次次世代へ繰り返されて実現する仕組みである事を思えば、むしろ逆に<縁>だけは個体の死後も残るような氣もして、親子の縁も今生限り、というのは、結構突飛な考え方にも見える。

*後の世のためにと(死後の路頭に迷わないように)、尊きことどもを多くせさせたまひつつ(善行を積むべく、有難い念仏を多く上げさせなさって)、「いかでなほ本意あるさまになりて(是非やはり出家を果たして)、しばしもかかづらはむ命のほどは(残り少ない命のかぎり)、行ひを紛れなく(念仏行に没頭したい)」と(と上は)、たゆみなく思しのたまへど(ずっと思っていて願ひ申

しなさるが)、さらに許しきこえたまはず(殿は決してお許し申しなさいません)。 *「のちのよ」はざっと<後世>であり<来世>でもあろうが、「御契りかけ離れ」という仏道に則った考え方をしていることからすれば、先ずは自分が死後に六道の路頭に迷わないようにしたい、という意味が強いと思う。

さるは(しかし)、わが御心にも(殿は自分の気持ちにも)、しか思しそめたる筋なれば(出家を考え始めていた事なので)、かくねむごろに思ひたまへるついでにもよほされて(このように上が真剣に考えていらっしゃるのに釣られて)、同じ道にも入りなむと思せど(一緒に出家してしまおうかとお思いになるが)、

一度、家を出でたまひなば(一度出家なされば)、仮にもこの世を顧みむとは思しおきてず(仮の話としても還俗することは想定なさらず)、後の世には、同じ蓮の座をも分けむと、契り交はしきこえたまひて、頼みをかけたまふ御仲なれど(来世では極楽浄土で共に暮らそうと約束を交わし申しなさって願掛けなされた御夫婦仲なれど)、

ここながら勤めたまはむほどは(余生を勤行生活なさる間は)、同じ山なりとも(同じ宗派であっても)、峰を隔てて(別のお堂で)、あひ見たてまつらぬ住み処にかけ離れなむことをのみ思しまうけたるに(会うこともない住処に離れて暮らすことになることばかりを構想なさるので)、

かくいと頼もしげなきさまに悩み篤いたまへば(このように上がとても不安定な状態で元気無くなさっていらっしゃっては)、いと心苦しき御ありさまを(とても心配なご容態を)、今はと行き離れむきざみには捨てがたく(今この時と別れ行く時機とは見限れ難く)、

なかなか(却って)、*山水の住み処濁りぬべく(清く済むべき山水の修行で住むべき生活を濁らせてしまうと)、思しとどこほるほどに(殿が出家を思い切れずにいる内に)、ただうちあさへたる(ただ浅い思い付きで)、思ひのままの道心起こす人びとには(簡単に入信してしまう人たちには)、こよなう後れたまひぬべかめり(すっかり後れを取ってしまうことになるようです)。 *「山水の住み処濁りぬべく」は注に<地の文中だが、「澄む」「住む」の掛詞、「水」と「濁る」「澄む」の縁語、という修辭が見られる。>とある。以下は軽口調で、煮え切らない源氏殿の姿勢を揶揄しているような語り。紫の上が、もはや更なる栄耀栄華に胸を躍らせる事など出来ずに、後は余生を心静かに送りたいと深く願っていても、殿は上との楽しい生活を夢見る事を諦め切れない。上の思いの重さに比べて、殿の思いはやはり軽い。が、何を如何言ってみても、この現実是不変。作者は、そんなことを言いたいのだろうか。

御許しなくて(殿のお許し無しに)、心一つに思し立たむも(上が御自分一人だけで出家を決心なさるといふのも)、さま悪しく本意なきやうなれば(穏やかに暮らすために事荒立てることになって、見苦しくもあり心苦しくもある)、このことによりてぞ(出家できずにいらっしゃること)、女君は(妻は夫を)、恨めしく思ひきこえたまひける(不満にお思い申しなさるといふことになったのです)。わが御身をも(このままでは、ご自分自身までも)、罪軽かるまじきにやと(善行が積めないで、良い来世が期待出来ないのではないかと)、うしろめたく思されけり(気が重く思われなされたのでした)。

[第二段 二条院の法華經供養]

年ごろ(そこで、ここ数年来と)、*私の御願にて書かせたまつりたまひける*『法華經』千部、いそぎて*供養じたまふ(殿が上の平癒祈願として写本させ奉じ申し上げなさっていらっしやった法華經千部を、上は急ぎ揃えて奉納式を挙げなさいます)。 *「わたくしのごぐわん」といっても、朝廷をはじめとした政務でなければ、祈願はおよそ個人的なものかと思うので、あえて「私の御願」というのは私的な祈願=病氣平癒>と見て置く。殿が上の平癒祈願を、上の為に「たてまつりたまひける」ということなのだろう。なお、「御願」のローマ字読みが「おほむぐわん」となっているが、「御願」は「ごぐわん」という一般名詞と読んで置く。*「法華經千部」は注にく『法華經』は全八巻、二十八品の經。それを千部写經させた。大勢の写經者が必要。大事業である。>とある。こうした形で本山は莫大な寄付を受け、写經僧は権威と名声を得て、末寺拡大が図れた、という一例を垣間見る思いだ。 *「供養じたまふ」の主語は紫の上。下に「女の御おきてにて」と明示がある。だから、「私の御願」という言い方をしていた、ようだ。本当に忌々しい主語省略文だ。なお、「くやう」は仏前に供物を奉じて御利益を願うこと、だろうから、この場合は、供物を添えて写經を叡山だろうか本山に奉納して、その御利益たる功德善行を積むための儀式、ということなのだろう。

わが御殿と思す二条院にてぞしたまひける(上はその供養法会を、ご自宅とお考えの二条院で執り行いなさったのです)。 *注にく「若菜上」巻にも「わが御私の殿と思す二条の院にて」(第九章二段)とあった。>とある。若紫巻で、紫君の故実母である大納言娘が生前に、紫君の実の父親である時の兵部卿宮の奥方を嫌っていた、という光君にとっては何の正当性にもならない口実で、光君が紫君を強引に二条院に引き取ったのは紫君が10歳くらいの時の話だった。時に光君18歳で、それから四年後に葵の上が死去して、その四十九日の喪明け直後に遂に光君が紫君に手をつけた、というのが葵巻での話だった。その十三年後、とは今から十六年前の夏の話だが、六条院が完成して、二条院から六条院に引っ越した、と少女巻に語られていた。須磨流離時代の寂しさも若さで乗り切って、波乱含みながら手応えのある二条院生活だったのだろう。光君の出世のままに、華やかな生活も味わったが、手応えということでは、紫君にとっては何処か出来レースの消化試合みたいに、流されて来た感があった六条院生活にも見えて来る。と、というようなことだろうか。

*七僧の法服など、品々賜はず(お寺へのお布施には役僧の法衣など、多くの物を与えなさいます)。物の色(その品々は)、縫ひ目よりはじめて(法衣の仕立ての良さを初めとして)、きよらなること、限りなし(その他の物もその立派さはこの上ありません)。おほかた何ごとも、いといかめしきわざどもをせられたり(総じて実に厳かに法会を営みなさいました)。 *「七僧の法服(しちそうのほふぶく)」は注にく講師(こうじ)・読師(とくじ)・呪願(しゅがん)・三礼(さんらい)・唄(ばい)・散花(さんげ)・堂達(どうだつ)の役僧たちの法服。>とある。鈴虫巻一章三段の入道宮の新規仏壇の御本尊開眼供養法会に際しても、紫の上がこれらを用意したと語られていた。

ことごとしきさまにも聞こえたまはざりければ(上は殿に、今回の法会を事改まった格式ある式典のようにはお知らせ申していらっしやらなかったの)、詳しきことどもも知らせたまはざりけるに(詳しい儀式作法については殿も上にはご指示申していらっしやらなかったが)、女の御おきてにてはいたり深く(上は女にしては行き届いた接客応対に)、仏の道にさへ通ひたまひける御心のほどなどを(仏道にも則った式次を催しなさい)、院はいと限りなしと見たてまつりたまひて(殿は法要自体については何も言う事が無いと上にお任せ申し上げなさい)、ただおほかたの御しつらひ(ただ二条院の外回りの管理や)、何かのことばかりをなむ(御方々への連絡などの

調整事ばかりだけを)、営ませたまひける(行なっていっしやいました)。楽人、舞人などのことは(法会に奉納する舞楽については)、大将の君(近衛舎人の将である源君が)、取り分きて仕うまつりたまふ(特に受け持って御奉仕申しなさいました)。*此処の文は、法要の具体的な形を良く知っているであろう宮廷読者に向けて、ざっと概略を話すような女房語りといった風で、何も力むこと無く流しているみたいだが、相変わらずの主語省略の紛らわしさもあって、私にはちっとも易しくない。が、力みが無い、ということは失うべからざる当文の味わいかと思い、私なりに分かり易い文意の筋で、鈴虫巻の入道宮の持仏開眼供養の場面などを参照して、割と気楽に言い換える。

*内裏(うち、帝)、春宮(とうぐう、皇太子)、後の宮たち(きさいのみやたち、秋好中宮や明石中宮)をはじめたてまつりて(を初めと申し上げて)、御方々(御方様方からも)、ここかしこに御誦経(それぞれにお布施や)、捧物などばかりのことをうちしたまふだに所狭きに(供物などを捧げてご寄進なさるのでさえ所狭しと品物が溢れているのに)、まして、*そのころ(まして上の平癒祈願と聞いて)、この御いそぎを仕うまつらぬ所なければ(この御法要に志を示し申し上げない者も居ないので)、いとちたきことどもあり(大変盛大な法事となりました)。*「内裏春宮後の宮たち」は注に<今上帝は朱雀院の御子。春宮は今上帝と明石女御の間に生まれた御子。「后宮たち」と複数形で語られているので、秋好中宮の他に明石女御が中宮になったことが暗示されている。明石女御の立后は初見の記事。>とある。明石姫の立后が、こんなに目立たない身内ごととして語られてしまうことに違和感を感じる私のほうが正しい、などと誰に主張しているのか分からないが、重大事かとは思ふ。*「そのころ」の文意は不明。上の病状に鑑みて、あたりか。私にとって分かり易い文意を考えた、当て図法だ。

「いつのほどに、いとかくいろいろ思しまうけけむ(上はいつのまに、これほど多くの事をご準備なさったのだろう)。げに、*石上の世々経たる御願にや(なるほど、磯の神から続く由緒ある王家に相応しい代々の長い年月を経た御祈願ということのようだ)」とぞ見えたる(と思える式典でした)。*「石上の世々経たる御願にや(いそのかみのよよへたるごぐわんにや)」は注に<「石上」は「ふる」に係る枕詞。ここは「世々経たる」にかけた修辭。古くから、の意。>とある。「石上(いそのかみ)」は<奈良県天理市の石上町・布留(ふる)町の辺り。〔歌枕〕>と大辞泉にあるが、この地名は石上神宮に由来しており、此処で言う「石上」は<石上神宮>を意味する。と言っても、現在の神宮の神社形式は明治以降に再整備されたものらしく、ウィキの当該ページに<この神社には本来、本殿は存在せず、拝殿の奥の聖地(禁足地)を「布留高庭」「御本地」などと称して祀り、またそこには2つの神宝が埋斎されていると伝えられていた。>とあるほどに、古い祭祀場だったらしい。同ページには<古代の山辺郡石上郷に属する布留山の西北麓に鎮座する。非常に歴史の古い神社で、『古事記』・『日本書紀』に既に、石上神宮・石上振神宮との記述がある。古代軍事氏族である物部氏が祭祀し、ヤマト政権の武器庫としての役割も果たしてきたと考えられている。>ともあり、この「石上」は、言語記号の文字化と抽象認識による論理的学識技術体系化型以前の古代の経験的気候対応管理型農耕集団を率いる長としての、精霊信仰に基づく呪術祈祷を司る王家の舞踏的伝統様式を象徴する言い方、と見て置きたい。

花散里と聞こえし御方(昔に花散里と申し上げた東の上の御方様)、明石なども渡りたまへり(明石御方なども参列なさいました)。*注に<花散里と明石御方に対する待遇の違いに注意。『完訳』は「花散里との身分差を表すべく、「明石」と呼び捨てた呼称」と注す。>とある。確かに、「明石」の呼び捨ては意外だ。花散里は王族出身で、明石は受領家筋だ。が、それでも情けを掛けた身に覚えがある殿の目線よりは、紫の上の目線を感じさせる言い方には見える。

南東の戸を開けておはします(寢殿の西の塗籠の南東の戸を引き開けて、その前の母屋に上は座していらっしやいます)。寢殿の西の塗籠なりけり(写経が積まれていたのは、その塗籠なのでした)。北の廂に(母屋の御簾前の南廂が僧侶たちの読経会場になっていて、御簾後の北廂に)、方々の御局どもは(御方様方のお座席は)、障子ばかりを隔てつつしたり(衝立だけで仕切っていたのです)。「みなみひんがしのと」は寢殿の東南の妻戸ではなく、母屋の西側にあった塗籠の南東の戸を母屋側に引き開いた状態で、その戸の前に当たる母屋に紫の上が座していた、という意味らしい。この文を一塊の式場説明文と見做して、左様に解して置く。が、原文は、大筋が分かっている人に要点を示すかの、簡素な書き方になっていて、実は私には全体の空間認識が丸でつかめていない。訳文にも、その辺りに関しての補語も無く、注釈も無い。ただ、法要場面はこの所続いていて、少し前の鈴虫巻の開眼法要や夕霧巻の小野山荘の祭壇などを参考にはしてみるものの、其処での記述も実際の法要を知らない私には霞んでいるし、そも、寢殿造りの屋敷構造も実感が無く、専ら「風俗博物館」サイトの説明文や、本当に僅かに寺社空間体験の印象だけを読む頼りなさだ。

[第三段 紫の上、明石御方と和歌を贈答]

三月の十日なれば、花盛りにて、空のけしきなども、うららかにものおもしろく、仏のおはすなる所のありさま、遠からず思ひやられて、ことなり(この写経奉納法会は三月十日のことだったので桜の花盛りの天気もうららかな良いお日和で、仏様がいらっしやる極楽にも似たように二条院が思われて格別な有難さです)。深き心もなき人さへ、罪を失ひつべし(信心の薄い人でさえも罪滅ぼしになりそうです)。「三月」は「やよひ」ではなく「さんぐわち」とローマ字読みがある。が、当然に旧暦だ。京都の桜の満開時期から逆算すれば、今の暦で四月十日あたりのことだろうか。

*薪こる讃嘆の声も(法要の見所である、木樵り修行を模して会場を回り歩く僧や貴公子たちの行列が歌う唱和歌が)、そこら集ひたる響き(大勢の声で響いて)、おどろおどろしきを(鳴り渡るのが)、うち休みて静まりたるほどだにあはれに思さるるを(終われば打って変わって静寂になる会場が時候の過ぎ去る物悲しさを思わせるが)、まして、*このころとなりては(まして病弱な今となっては)、何ごとにつけても、心細くのみ思し知る(何につけても、上は気弱にばかりお考えになります)。*「薪こる讃嘆の声(たきぎこるさんたんのこゑ)」は、古語辞典の「薪」の項の説明などから見て、どうやら<「薪の行道(たきぎのぎやうだう)」で唱和される歌>のことらしい。「薪の行道」は<法華八講の第三日目に、行基の作と伝えられる「法華経を我が得しことは薪こり水汲み仕へてぞ得し」の歌を歌いながら、薪を背負い水桶を担った者が、僧たちの後に加わって行進する行事。薪の讃嘆。>とある。「行基(ぎやうき)」は<(668-749)奈良時代の僧。和泉の人。俗姓、高志氏。道昭・義淵らに法相(ほつそう)教学を学ぶ。のち諸国をめぐり、架橋・築堤など社会事業を行い、民衆を教化し行基菩薩と敬われた。その活動が僧尼令に反するとして弾圧されたが、やがて聖武天皇の帰依を受け、東大寺・国分寺の造営に尽力し、大僧正に任ぜられ、また大菩薩の号を賜った。>と大辞林にあり、最新の土木技術で公共事業を指導した実践僧で、権威保持に窮した宮廷学識僧とは比べ物にならない尊敬を民衆から受け、その絶大な影響力を以て仏教の普及に貢献した、というのが、ざっと見の印象だ。「薪の行道」は以前にもこの物語で触れられていた覚えがあり、「法華八講(ほっけはっこう)」という法華経講座の正規法要行事形式に組み込まれている一儀式のようで、賢木巻五章二段の藤壺入道宮主催の法華八講の場面でも「薪の行道」は語られていた。また、「法華八講」については、「明」という人の<ブログ「源氏物語」>で丹念に考察が試みられていて、その詳細さには恐れ入るが、特にそれらのページで参照掲示されている「風俗博物館」展示の画像が御涙物で、この場面の理解にも大いに豊かな臨場感が得られた。尤も、同ブログ主筆は雑感として「紫の上の法華経千部供養は法華八講か否か」という問題提起をして、「八講であると考えても八講ではないと考えても矛盾が生じる不可解な内容に

なっています。」と控え目ながら、少なくとも<正規の八講法会ではなさそうだ>と論じておられる、ように見える。私は尚更分からないが、ざっくりと、女の真似事、みたいに見て置く。とはいえ、「内裏、春宮、後の宮たちをはじめたてまつりて、御方々、ここかしこに御誦経、捧物などばかりのことをうちたまふ」という格式の高さではある。が、あくまでも公儀ではなく、二条院の紫の上の、最大限に言っても六条院殿の、私的な儀式であり、ということは、式次第は様式の正当性よりは、法儀に触れない限りは施主の自由裁量に許されるワケで、正規法要の最大のイベントであるらしい<木こり行列>を、この私的な法要でもメインに演出する、というのは有り勝ちな話にも思える。それに、簡略化された形の中に最も説得力のあるエッセンスが示される、というのは雑誌編集者の生命線だ。この、そのもの自体にどっぷり浸かる味わいは読者各位の嗜好に任せる、という扇動は、今だと些末な日常情報の消費刺激効果くらいしか意味しないが、この法要描写は、当時の貴族子女の人生観を変えるほどの羨望を受ける文化衝撃だったのかもしれない。つまり、唯一手が届きそうなく自由>が其処に示された輝き、だ。然かも、行列に参加する列席者は、まだ位も低く年若い貴公子ばかりだったろうし、近くを過ぎれば焚き染めた香が漂うとあっては、もう子宮も痺れるか。いや、紫の上自身は枯れているようだが、読者の若い子女は、どれほど紫の上に憧れた事だろう。などということ、専ら見事な与謝野訳文を読んで感想する。*「このころ」は注に<『集成』は「死期の近きを悟るこの頃、という含み」と注す。>とある。二段にも「ましてそのころ」という言い方があって、「そのころ」は<傍目での上の病状>と読んだので、この「このころ」は<上自身が自覚する病状>と読むことに異議はない。が、先立つ話題として特に病名が知らされたり、病状の変化が述べられている訳でもないのに、「そのころ」「このころ」の曖昧な語用にくらかの違和感はある。

明石の御方に(そして上は、明石の御方に)、*三の宮して、聞こえたまへる(手許に引き取ってお育て申し上げていらっしゃる三の宮に色紙をお運び頂き申し上げなさって、次の歌を贈りなさいました)。*「三の宮」は、横笛卷三章一段の、源君が六条院源氏殿に故衛門督の横笛の処分を相談しに行った場面で、「三の宮、三つばかりにて、中にうつくしくおはするを、こなたにぞまた取り分きておはしませたまひける」と、その時点で紫の上が引き取って育てている事が示されていた。是が二年前の秋のことなので、三の宮は今年で5歳だ。序でに言えば、若菜下卷十一章五段の「女御の君も里におはします。このたびの御子は、また男にてなむおはましける」とあったのは、今から四年前の朱雀院の五十賀直前の十二月十日頃の話であり、その御子は今年で5歳に符合するので、この時の御子が三の宮だ。などと改めて言うのは、横笛卷三章二段に於いて、その時に里帰りしていた女御に連れられて来ていた「二の宮」が登場していて、その際に女御の御子たちについて私は整理を試みたノートをしていたのだが、其処では結論が得られなくて、此処で再考を試みる、という次第だ。と言っても、今、先にく<若菜下卷十一章五段の「御子」が三の宮だ>と結論付けてしまったので、その横笛卷三章二段に於いても、実は若菜下卷の記述に基づく結論は得られていて、その時点では単に混乱していて結論を見逃していた、に過ぎなかった、ということ、此処に来て確認した、というお粗末ではある。即ち、若菜下卷の記事はこうあった。先ず女御は「御子二所おはするを、またもけしきばみたまひて、五月ばかりにぞなりたまへれば、神事などにことづけておはしますなりけり」(三章五段)とあって、この年初の「御子二所おはする」という記事は、立太子して独立した宮体制を構えた第一親王を除いた、第二親王と第一内親王のことであることは、その年の暮れに子連れで里帰りした女御が、その年に産んだ子が「三の宮」だったと分かった時点で、その他にその時点では子が無いことが示されていて、実は御子の内訳は既に明示されていた、というワケだ。三の宮は、年初(若菜下卷三章五段で言う「里帰り」自体は前年末)に「五月(いつつき)ばかりにぞなりたまへれば」と妊娠五ヶ月が明示されていたので、同年の夏ぐらいに生まれたのだろうが、その出産時点での話題が語られずに、年末の女御の子連れ里帰りで生後6~7ヶ月の三の宮が登場したために紛らわしかった。しかし、二の宮については、若菜下卷五章二段で源氏殿が七弦古琴を論じた際に、「この御子たちの御中に、思ふやうに生ひ出でたまふものしたまはば、その世になむ、そもさまでながらへとまるやうあ

らば、いくばくならぬ手の限りも、とどめたてまつるべき。二の宮、今よりけしきありて見えたまふを」と、自分の技法を引き継ぐ素質が「二の宮」にありそうだと期待を滲ませた場面で示されていた。また、女一の宮については、同巻三章一段で「春宮の御さしつぎの女一の宮を(皇太子のすぐ下の女一の宮を)、こなたに取り分きてかしづきたてまつりたまふ(紫上は東の対に引き取って大切に御養育なさいます)。その御扱ひになむ(その御世話焼きで)、つれづれなる御夜がれのほども慰めたまひける(遣る瀬無い殿の夜離れのほども慰めなさいます)。いづれも分かず(紫上は桐壺女御の御子たちを、分け隔て無く)、うつくしくかなしと思ひきこえたまへり(いとしくかわいいと思ひ申しなさいました)」と、紫の上の不利な立場の語る際に、疾うに示されていた。ともあれ、女一の宮と三の宮は紫の上が手許で育てていた、ということは此処に改めて確認できた。

「惜しからぬこの身ながらもかぎりとして、薪尽きなむことの悲しさ」(和歌 40-01)

「覚悟していた心算でも、消え去ることははかなくて」(意識 40-01)

*注に「『源氏積』は「法華経を我が得しことは薪こり菜つみ水汲み仕へてぞ得し」(拾遺集哀傷、一三四六、大僧正行基)「菓(このみ)を採り水を汲み、薪を拾ひ食(じき)を設け」(法華経、提婆達多品)「薪尽て火の滅するが如し」(法華経、序品)を指摘。「この身」に「菓(このみ)」を掛け、法華経の経文を暗示する。>とある。この身-菓(このみ)-薪拾ひ-木こり修行、ということで、その「薪こる讃嘆の声も」<かぎりとして>「うち休みて静まりたるほどだに」なのが、まるで<薪尽きなむことの悲しさ>のように「あはれに思さるる」、という歌筋らしい。「この身ながらもかぎりとして」は、そのまま現代語でも<こんな自分でも、いよいよ命が尽きるかと思えば>を意味する。「薪尽く」は<「法華経」序品(じょほん)の「仏この夜滅度し給ふこと、薪尽きて火の滅するがごとし」の句から>釈迦(しゃか)が入滅する。>という言い方で、延いては<命が尽きる。死ぬ。>と大辞泉にある。「薪尽きなむ」は<薪が燃え尽きてしまう→いよいよ死んでしまう>。「法華経の経文を暗示する」と言うよりも、法華経の序文を引くことで、諸行無常とは言いながら、物事の終わりはやはり寂しい、と素直な感想を言い表す事が出来た、みたいに見える歌。この言い回しの工夫が無かったら、率直にすぎて、口に出すのが恥ずかしいくらい、いつか死ぬとは分かっている、いざとなると悲しい、という心境の吐露。他に何か別の歌筋があるのだろうか、と、是だけだと簡単過ぎて不安になるほどの歌意だ。が、私には別意は分からない。それは左て置き、この歌について少しウェブ検索したら、「花橘亭」サイトの「風俗博物館展示レポート」コーナーの「初春の京都 2007年1月17日」ページの「紫の上による法華経千部供養」展示の画像集に思わず出くわした。およそ溜息物だが、その中に紫の上が塗籠にいる場面があって、そういう設定も有り得るのかと感心した。画像情報の豊富さも然り乍ら、風俗博物館の事細かな展示の説得力には改めて圧倒される。いや勿論、物語の場面再現を企画した出典は、建物や人物や小物類までに至る参照展示であり、疑問点というか、一考察例と心すべき面もあるだろうが、時代考証に於いて、先ずは諸事物の基本的な様式や作法の心得が無ければ、何一つ具現化出来ない訳なので、その知見に感服する。

御返り(御返歌は)、心細き筋は(上の心細い歌筋に同調するのは、誘いに乗る心優しさのようでも、上の死期の近さを認める浅はかさでもあるので)、*後の聞こえも心後れたるわざにや(後で咎められることに気後れたためか)、そこはかたなくぞあめる(卒無く取り成して次のようであったようです)。*後の聞こえも心後れたるわざにやは注に「にや」「あめる」は語り手の推測を介入させた叙述。『評釈』は「作者は、「心細き筋は、のちのきこえも心おくれたるわざにや」という。かように挨拶にすぎない歌を明石によませた弁解を試みたのである。--『源氏物語』には、作中人物が歌をよむ場合、作者はその歌に弁解的な批評を試みるのが時にある。--しかし、今の明石の場合については今一つの解釈が可能である。--そこには、後世の思わくを気にする明石の御方の態度を、非難するかのような口ぶりさえみえる。明石の御方に、

何事にも行きとどいた人として、礼儀正しい返歌をさせ、しかも、その礼儀正さが物足りないとは非難するのである。『集成』は「次の明石の上の歌に対する語り手の解説」と注す。>とある。確かに、病弱の人が気弱なことを言えば、励ますのが普通で、通常の日常生活上の行き違いで少し落ち込んだ人に同情するのは意味が違うことくらいは当たり前の状況認識かと思われ、此处で敢えて<「後の聞こえ」を気にした>ということを取り上げることに、作者の特別な意図を感じる。ただ、それが「非難」なのかは、此处ではまだ判然としない。一の宮の立太子が叶って、自分の血筋が王家に繋がった後でも、変わらない明石御方の人柄を再確認する、という単純な意図だって、全く無いとも言い切れない。

「薪こる思ひは今日を初めにて、この世に願ふ法ぞはるけき」(和歌 40-02)

「今日が修行の始まりと、功德に励みなされませ」(意識 40-02)

*注に<明石の御方の返歌。「于時奉事、経於千歳」(法華経、提婆達多品)。「薪尽きなむ」を「薪こる」、「この身」を「この世」と言い換え、「限り」を「はるけき」と長寿を寿ぐ歌にして返す。『異本紫明抄』は「あまたたび行き逢ふ坂の関水に今はかぎりの影ぞ悲しき」(栄華物語、鳥辺野)「年を経て行き逢ふ坂の験ありて千年の影をせきもとめなむ」(栄華物語、鳥辺野)を指摘。>とある。法華経の経文を、その一部にせよ下敷きにした歌詠みで、互いに其処に込められた意味が分かるという当時の人々の教養は、私には無いので、とても其等の味わいまでは分からないが、筋だけは尾って置く。と言っても、「法ぞはるけき」の「法(のり)」は<方法=修行の仕方>であり<仏法経典=読経>であって、それが「はるけし(修行に終りが無い=生き続けなければならない=余生の長きを願う)」という言い方なので、どこまでも経文絡みの趣きだ。で、その上での雑感だが、同様の法華経の詠み込み方としては、御方のこの返歌の方が上の贈歌よりは練れているように見える。帖名に繋がる出来の良さ、でもありそうだ。私には分からないが、意外に作者の自信作だったりして。尤も私のような門外漢から見れば、この歌はその上手い言い回しの他には情緒はなく、上の率直さに応えていない、という嫌いはあるが、歌の命は第一に言い回しの妙であって、その巧みさが受け手各自に情感を呼び起こすのだとしたら、仏法修行の情緒を知る人にとっては、この御方の歌は滋味豊かでさえ有り得る。もしかすると、上文の「後の聞こえも心後れたるわざにや」は、この味わいが分かるかと、読者の教養を試して鎌を掛けた作者の遊び心なのかも知れない。いや、だがしかし、教条の快感を盲信して消費されてきた、または消費されている、または消費されるであろう、膨大な個体数を鑑みれば、有機体反応の面白さは多様性こそに有る、みたいなへソ曲がり根性が疼いて、クソ食らえ！と言わんばかりの気構えで教条を振り切る姿勢を持ちたくなる。確かに、先人の知恵も多様性の一つには違いなく、教条はその中でも相当に優れた知見で有る可能性は、その広い説得力からして想像に難くないが、決して唯一の解ではないことを何より先に格納すべきで、最良の解は時々刻々と変わり続けるものだ。多くの作業を公式処理の機械任せにする便益性は個人生活にも社会運営にとっても非常に有効であり、今日の電化時代にあっては相当に複雑な公式の組み合わせも機械処理に実現できるので、その価値は増す一方だが、他方では、公式処理で収まらない案件を怠惰にも教条に頼って現実逃避するよりは、自分の生理しか信じない女の浅知恵の方がよほど生産的で、今こそ其の断固たる現実認識の出番だと言いたい所だが、残念にも知恵の格納が無いことを浅知恵と言うらしく、知恵が付いたと思ったら、バカの一つ覚えだった、とは情けない。いや、是は決して女への偏見ではない心算だ。

夜もすがら(夜が更けるのもそのままに)、*尊きことにうち合はせたる鼓の声(尊い読経の声に続く演目として打ち合わせてあった舞楽の鼓の音が)、絶えずおもしろし(絶え間なく奏じられて法要も佳境です)。*「尊きこと」は訳文に<尊い読経の声>とある。従う。が、「つづみのこゑ」は經典声明に打つ太鼓でもあるかもしれないが、それが一晩中続くのも興趣に欠け、「うちあはず」は<頃合いを見て引き継ぐ>

との掛詞になっていて、読経に続いて奉納の舞樂が演目として「うち合はせたる(予定されていた)」、という語りになっているらしい。ところで日本では、仏法は専ら死生観を説く論理という位置付けで、幸運を乞い祝う神事のお祭とは違って、派手な舞樂が似合わない印象があって、この場面には何か不思議な気もして、此処で法会に演舞を奉納する事の意味合いを少し考えて見てみたい。で、逆に、神事に演舞が似合うのは何故なのか、を先ず考える。それは、幸運を祝う心や、幸運に感謝する心や、幸運を願う心、などを神前に示す事が大事であり、「舞」が其の心を示すことになっている、と多くの人が考えているから、ではないだろうか。「舞(まひ)」の動詞は「舞ふ」だが、この「ま・ふ」の「ま」は<目、真>で、「ふ」は反復・継続を示す助動詞で、「目ふ」は<見せ続ける→実態を見せ付ける→動きで気持を表し示す>という言い方で、「舞」はその象徴形態だ、というのはどうだろう。是で「まへ(前)」の説明も付くような気がする。で、法要は仏儀祭事だから、本来は奉納舞いは変じゃない、とか。それに、当時の感性からすれば、仏教も管弦も演舞も皆同じ大陸の進んだ文化みたいなノリで、その有難さを一緒に楽しんだ、とかもありそうだ。そんな雰囲気の中で「絶えずおもしろし」と言うのは、その<引き継ぎを含めた演舞の味わい>を示しているのだろう。そう読むと、下文への繋がりが良い。

ほのぼのと明けゆく朝ぼらけ(空が白染む曙に)、霞の間より見えたる花の色々(霞掛かって見える花の色々が)、*なほ春に心とまりぬべく匂ひわたりて(まだ春の情緒を惜しむように咲き広がって)、百千鳥のさへづりも(多くの小鳥たちのさえずりも)、笛の音に劣らぬ心地して(舞樂の笛の音に劣らぬ良い風情で聞こえて)、もののははれもおもしろさも*残らぬほどに(深い味わいも心楽しさも此処に極まるという頃合いに)、*陵王の舞ひ手急になるほどの末つ方の樂(奉納舞樂の「陵王」の踊り手の振りが早くなる終盤の演奏が)、はなやかににぎははしく聞こゆるに(華やかに陽気に聞こえて来て)、*皆人の脱ぎかけたるものの色々なども(舞人たちが皆、庭先の草木の上に無造作に脱ぎ掛けた衣装の色々なども)、ものをりからにをかしょうのみ見ゆ(現世未練を断ち切ろうという納経法会だけに、その頼りない抜け殻の有様が現世でもがく自分の浅ましさにばかり上には思えました)。*「なほ春に心とまりぬべく」は死を目前にして、現世に未練を感じる紫の上の心情を表す表現、なのだろう。*「残らぬほど」は<此処に極まるという時>と訳文にある。思い残しを失くした時、という言い換えも、死期を悟った紫の上の心情を重ねれば味わい深い言い方だが、到達感では今いちピンと来ない。此処に極まる、は名訳だ。*「陵王の舞ひ手急になるほどの末つ方の樂」は注に<『集成』は「陵王の場合には、終曲にテンポの早くなることか。一般には序破急の急であるが、陵王には急がない」と注す。>とある。私にはこの注釈の解説意が全く分からないが、この文が破綻しないように読むなら、「急になるほど」は曲ではなく「舞ひ手」なのだから、舞の振りが忙しくなる、または大きくなる、くらいの言い方かと思う。「末つ方の樂」という言い方には曲の終盤の意と舞樂全体の終盤の意が掛けられているのだろうか。ユー・チューブで<薬師寺「花会式」奉納舞樂「蘭陵王」>(18:01分)の動画を見たが、私がこの舞樂の何処が如何と断定できる筈もない。ただ、動画を見る限り、この舞は全体に振りが大きく、動作間合いも結構早く、相当な運動量のように、終盤だけが<急>になるものでもなさそうだ。が、それでも、09:00くらいまでは何か物語設定が有るかの説話舞いっぽい雰囲気、演奏も雅樂器固有の笛と太鼓の自然素材和音を、その経験的な持続管和音構成と間合いを取る鼓で舞いに合わせている印象で、舞の動きほどには演奏は動かない。その09:00で休止および音調整があった後、09:50くらいからが主題舞いになる感じで、初め暫くは横笛が基調を示して10:10鼓が小節頭打ち、10:13鼓・鉦が少しずつれて小節頭打ち、やがて太鼓も序を出し、10:30くらいから箏や笙が加わって10:57から1回目のAメロが始まる、12:08くらいからBメロだが打楽器は序のまま間引き頭打ち、13:05くらいからCメロで次第に4小節ごとの頭打ちがはっきりして緩に入る、14:34から2回目のAメロで鉦は4小節毎だが鼓や太鼓は2小節目をまだらに打つ、16:05から2回目のBメロだが、この少し前から打楽器の打ち数が増えて、時に裏打ちもありはっきりと2拍子が感じられるの

で、このBメロ部分は急の印象で、舞も今で言うダンスのように演奏に乗って踊っている感じだ。16:39からはCメロからコーダに結ぶので緩にはならないが、またいくらか抑え気味になる印象。形式としての<急>は無いのかも知れないが、実際の舞楽では終盤に<急>の印象の盛り上げはあった。尤も、この物語場面での「陵王」が動画に近いのかも分からないので、何とも頼りない話だが、何かを頼らないと話も進まないのでは、終盤になって踊りが早くなった、ことにして置く。*「皆人の脱ぎかけたもの色々など」は渋谷訳文に<一座の人々が脱いで掛けていた衣装のさまざまな色など>とある。「一座」とはどういう人たちなのか、何を何処に脱ぎ掛けていたのか、私にはさっぱり分からない。また、与謝野訳文には<殿上の貴紳たちが舞い人へ肩から脱いで与える纏頭の衣服の色彩など>とあるが、是も分からない。ただ、「脱ぎかけた」と敬語遣いが無いので高官たちの動作ではなさそうで、高官でなければ舞人への褒美など僭越だろうから、大筋の文意は渋谷訳文にいくらか分が有りそうには見える。が、やはりこの語り口では、私にはとても文意が取れない。ただ、「皆」については、「陵王」は一人舞いらしいが、舞楽の約束事にある番舞(つがひまひ、左方の出し物に対して右方が応える形を以て一番フェイズとする)の演目としては、左舞の「陵王」に対して右舞は「落蹲(らくそん)」になるとのことで、2007年の風俗博物館での展示にも「陵王」の赤い装束と「納曾利(なそり、落蹲の二人舞)」の青い装束での舞楽場面があったように「花橘亭」サイト他にも画像掲示があり、その他の演目も有り得たとすれば、この「皆人」は<舞人の皆>と見做す事も出来るのかも知れない。他にはちょっと手掛かりが見当たらない感じで、もう当て図法だが、「ものをりからに」を<法要の時だけに>と取って、であるなら、この文は紫の上の内心に沿った語り口なのだろうと見当をつけて、それに見合いそうな解釈を試みる。しかし、本当に分からない。

親王たち(皇子たちや)、上達部の中にも(高官たちの中にも)、ものの上手ども(楽器の上手な者は)、手残さず遊びたまふ(芸を惜しまずに演奏なさいます)。上下(かみしも、身分の高い者も低い者も)心地よげに(公儀ではない私儀ならではの身内の親近感で)、興あるけしきどもなるを見たまふにも(和やかに打ち興じている様子の数々を御覧になるにつけても)、残り少なしと身を思したる御心のうちには(上は病弱となって余命少なしと覚悟なされた御心の内には)、よろづのことあはれにおぼえたまふ(この華やいだ現世の春が全てはかなく思えなさいます)。

[第四段 紫の上、花散里と和歌を贈答]

昨日(きのふ、昨日は法要で)、例ならず起きゐたまへりし名残にや(いつになく夜明かしなされたのが災いしてか)、いと苦しうして臥したまへり(今日の明け方は、紫の上はとても体調が優れずに横になっていらっしやいました)。*注に<法華経千部供養の翌日。「にや」は語り手の推測を交えた表現。『湖月抄』は「地」と注す。>とある。

年ごろ、かかるものの折ごとに(何年来と、こうした催しの折り毎に)、参り集ひ遊びたまふ人びとの御容貌ありさまの(源氏殿に参り集って楽器を演奏なされる公卿方の御姿ご様子の)、おのがじし才ども(それぞれの優れた技巧や)、琴笛の音をも(管弦の音色なども)、今日や見聞きたまふべきとぢめなるらむ(今日が見聞き納めになるだろう)、とのみ思さるれば(とばかり思えなされて)、さしも目とまるまじき人の顔どもも(普段は特に目を止めることもない疎遠な人々の顔までも)、あはれに見えわたされたまふ(しみじみ見渡されなされるのでした)。

まして、*夏冬の時につけたる遊び戯れにも(まして内々の夏や冬に恒例の音楽会や絵合わせ遊びなどにも)、なま挑ましき下の心は、おのづから立ちまじりもすらめど(張り合う負けん気は自

然と起こりもするだろうが)、さすがに情けを交はしたまふ方々は(それでいがみ合う訳でもなく親しく交わりなされた他の御方様方は)、誰れも久しくとまるべき世にはあざなれど(誰でも何時かは死ぬものだが)、まづ我一人行方知らずなりなむを思し続ける(先ず自分が一人で先立つことになるだろう事を思い続けなされば)、いみじうあはれなり(非常に寂しい)。*「夏冬の時につけたる遊び戯れ」は渋谷訳文に<夏冬の四季折々の音楽会や遊びなど>、与謝野訳文に<四季の遊び事>とある。大体そういうことだろうし、それ以上に具体的な事が示せるものでもないが、「春秋」が多く<花見>を思わせることからして、「夏冬の時につけたる」は暑気払いや寒さ凌ぎといった憂さ晴らしの励みになるように設定された<恒例の>音楽会や競技会のことを言っている、ように取って置く。

こと果てて(法要が終わって)、おのがじし帰りたまひなむとするも(各自がお帰りをなさろうというの)、遠き別れめきて惜しまる(最後の別れのように名残惜しい)。

花散里の御方に(上は花散里の御方にこう贈歌なさいます)、

「絶えぬべき御法ながらぞ頼まるる、世々にと結ぶ中の契りを」(和歌 40-03)

「あなた様とのご縁にも、御利益願ひ申します」(意識 40-03)

*注に<「御法」の「み」と「身」の掛詞。法会の結縁の席で同席した親近感を訴える。>とある。「御法」に「実り(成果)」を掛ける語法は無いのだろうか。というか、「御法」という語自体に<法会>と<仏法の御利益-成果-実り>は掛けられているようだ。「御法ながらぞ」は<この法要を挙げたのだから、その御利益があるだろうと>という言い方で、この言い回しが、この歌の筋と意の全て、なのだろう。が、そこで俄然、洒落を利かしているのが「絶えぬべき」だ。「絶ゆ」は下二段活用で未然系も連用形も「絶え」であり、「絶えぬ」は<絶えてしまう=終わってしまう>と<絶えない=終わらない>の両意を成立させている。「絶えぬべき御法ながらぞ頼まるる」は<最後になりそうな法会だからこそ懇願する>と<終わらないように御利益があるものと頼りにする>を複意するという巧妙さだ。また、「世々に」は<過去・現在・未来に渡って>ということらしいが、現在までの因縁自体は未来にどのように現れるにせよ、因果応報して続いてしまうようなので、「中の契り」は<あなたとの良縁を望む→互いに善行が積めたと信じたい>ということなのだろう。ただ、凝った言い回しの割りには、中身は卒の無い挨拶の印象で、明石御方に対する姿勢とはずいぶん違って見える。紫の上は狡賢く立ち回る人ではない、という設定だろうと踏んで、明石御方に対しては侮りではなく親しみを持った歌詠みなのであり、花散里御方様に対しては王家血筋に敬意を表した参列御礼の詠み方、と取って置く。

御返り(御方様からの御返歌はこうあります)、

「結びおく契りは絶えじ、おほかたの残りすくなき御法なりとも」(和歌 40-04)

「固くお誓い申します、及ばぬ身ではありながら」(意識 40-04)

*注に<「絶えぬ」「御法」「結ぶ」「契り」の語句を受けて、縁は絶えないでしょう、と同意した歌。『集成』は「おほかたの」は、世間一般には、の意。そのなかに自分をこめ、しかし紫の上は特別で、末長いお命を保たれ、法会も営まれます、という祝意がある」と注す。>とある。こちらの「御法」にこそ、「み」と「身」が掛かっている

そうだ。「みのり」は「身伸り(身の糊代=余命)」とか「身の利=あなたの現世利益」といった語感で、この「身」を「御」と換えても<個人への尊称>だが、「御利益」の「御」は<一般尊称>または<御仏の慈悲>を意味しそうだ。

やがて(そのまま会場では源氏殿が)、このついでに(納経法要に続いて)、*不断の読経(ふだんのどきやう、平癒祈願の結界を守る連続読経や)、懺法など(せんぼふなど、信心を誓う経文などを)、たゆみなく(力を抜くこと無く)、尊きことどもせさせたまふ(高僧に挙げさせなさいます)。御修法は(しかし其等の加持祈祷は)、ことなるしるしも見えでほども経ぬれば(はっきりと上の病状に改善の効果も見えないまま何日も続いたので、二条院の正面式場は片付けて)、例のことになりて(次第に普段の形に戻って)、うちはへさるべき所々(続きは上の部屋の仏壇などの所定の場所や)、寺々にてぞせさせたまひける(寺々などで読経を上げさせなさいました)。 *「不断の読経懺法など」は注に<僧侶が輪番で昼夜間断なく読み続ける読経と罪障を懺悔し滅罪を願う法華懺法。>とある。連続読経を結界張り、懺悔を信心深さ、と見て置く。

[第五段 紫の上、明石中宮と対面]

夏になりては(四月に入って夏になると)、例の暑さにさへ(いつもながらの暑さにさえ)、いとど消え入りたまひぬべき折々多かり(紫の上は一層弱って死んでしまいそうにお成りになる時が多かりました)。 *注に<物語は法華経千部供養の行われた三月十日から夏四月に移る。この間およそ二十日間が経過。>とある。

そのことと(どこがどうと)、おどろおどろしからぬ御心地なれど(ひどくお苦しみになることはないが)、ただいと弱きさまになりたまへば(ただめっきり憔悴していらっしゃって)、むつかしげに所狭く悩みたまふこともなし(病状を特に訴えなさることもありません)。さぶらふ人びとも(側仕えする女房たちも)、いかにおはしまさむとするにか(上はどうなってしまいなさるのだろうか)、と思ひよるにも(と思うにつけても)、まづかきくらし(先ず悲嘆に暮れて)、あたらしう悲しき御ありさまと見たてまつる(惜しまれる痛々しいお姿と拝し申します)。

かくのみおはすれば(上がこうした病弱の状態一方でいらっしゃったので)、*中宮(明石姫の桐壺中宮がその御見舞にと)、この院にまかでさせたまふ(二条院に御所から御退出して来られなさいます)。 *「中宮」は注に<明石中宮、二条院に養母紫の上を見舞うべく退出する。「させたまふ」最高敬語表現。>とある。単独での「中宮」呼称は初出。

東の対におはしますべければ(中宮は東の対を居室になさる御予定なので)、こなたにはた待ちきこえたまふ(紫の上は病室の西の対から此方の東の対のお部屋に移って、その御到着を心待ちに待ち受け申しなさいます)。 *注に<東の対を明石中宮の居所と予定される。紫の上は病室の西の対から東の対に移って、そこで中宮を待つ。>とある。「こなたにはた」の「はた」の語感、上が中宮の御見舞をどれほど忝く有難く、また、嬉しく思っているかの表現なのだろう。全て明示する。

儀式など(中宮の里帰り行列の仕立ては)、例に変らねど(普通と同じ編成だが)、この世のありさまを見果てずなりぬるなどのみ思せば(やがて東宮が即位なさって中宮が皇太后になられて、ますます栄華を極めなさるまでは見終えないままに自分が死んでしまうこととお思いになると)、よろづにつけてものあはれなり(その御到着の様子 of 全てが感慨深い)。*名対面を聞きたまふに

も(上は女房から中宮の供奉者の名前紹介をお聞きなさるにつけても)、その人、かの人など、耳とどめて聞かれたまふ(一人一人を誰それと確かめなさいます)。上達部など(高官たちなどが)、いと多く仕うまつりたまへり(大勢付き従って来ていらっしやいました)。*「名対面(なだいめん)」は警備員が業務交代時の担当者点呼に自分の姓名を名乗る自己紹介らしいが、また、そういうことはこの場合でも侍所で交わされた着任者の挨拶にもあったのかもしれないが、此処は東の対の母屋前南廂か縁側付近場面での事柄だろうし、下に「上達部など」ともあるので、本人の自己紹介ではなく、郎党か女房がその御成りを紫の上にお伝え申し上げた中宮の従者の<名簿報告>なのだろう。いや、その上での御簾前での自己紹介はあったか。注には<行啓供奉の公卿などが入御の後、名を名乗ること。>とある。

久しき御対面のとだえを(久しく御対面が無かったのを)、めづらしく思して(上はいと愛しみなさって)、御物語こまやかに聞こえたまふ(中宮にお話しを親しくなさいます)。院入りたまひて(源氏殿が御簾内にお入りになって)、

「*今宵は、巢離れたる心地して、無徳なりや(此処で邪魔者扱いされたのでは、今夜は家を失くした様な気がして始末が悪い)。まかりて休みはべらむ(他所を探して休むとしよう)」 *「今宵は巢離れたる心地して」は注に<以下「休みはべらむ」まで、源氏の詞。主語は自分源氏自身。『集成』は「今夜は、巢を無くしたような気がして、体裁の悪いことだ。紫の上は中宮と語り合っていて、側へ寄せないことを戯れて言ったもの」と注す。>とある。上と中宮が仲睦まじく話し込んでいて、殿が入り込む隙がない。その微笑ましい光景が、自分の生家にも等しいこの二条院東対屋に実現している充実感。これ自体は、浮かれ気分で冗談の一つも言いたくなるほどの上首尾なのだが、同時に紫の上の衰弱も酷い。そのことも笑いに紛らしたい、みたいな複雑な戯れに見える。二条院東の対は、源氏殿が自室として長く暮らした家だ。六条院東の対は、源氏殿と紫の上夫妻の家、という位置付け。どちらもあるのだろうが、「巢」は<育った所>の語感。「無徳(むとく)」は<価値を失ってしまうさま。台無しになってしまうさま。ぶざまなさま。>と大辞林にある。物理的に手立てを失くした状態、みたいな語感。「まかる」は中宮に対する敬語遣いなのだろう。「参る—まゐる—目居る—目の前に居る様にする」の対語で「目の前を離れる—目離る—まかる—罷る」だろうか。「目」は殊更に言う場合は<貴人の目>らしい。

とて(と言って)、渡りたまひぬ(他のお部屋に出て行かれました)。起きゐたまへるを(紫の上が病床から起き出ていらっしやるのを)、いとうれしと思したるも(珍しいことと嬉しくお思いになるのも)、いとほかなきほどの御慰めなり(決して回復したのではなく最後の元気を振り絞っての中宮との御面会と知れるので、殿にとってもほんの一時だけの御慰めなのでした)。

「方々におはしましては(別のお部屋にいらっしやったのでは)、あなたに渡らせたまはむもかたじけなし(あなたにあちらの対屋にお出で頂くのも恐れ多いと思われますし、)。*参らむこと(私が御用の度に此方へ参りますのも)、はたわりなくなりにてはべれば(また難儀になってしまいましたので)」 *「参る」は<御所に参内する>ようにも聞こえるが、「方々におはしましては」を受ける文脈であれば<この中宮の部屋に来る>という意味の謙譲表現と取るべきなのだろう。であれば、「かたじけなし」で句点を打たずに、読点で下に続けるべき、かと思う。「かたじけなし」の文法解釈は、形容詞の終止形で下に<と思へたまへられ>などが省かれている、とか、話語なので形容詞ではなく感動詞か副詞としての語用で直接聞き手に謙譲意を伝えたもの、とか、辻褄の付けようは何か有る、かと思う。

とて(ということで)、*しばらくはこなたにおはすれば(紫の上が差し当たって数日は此方のお部屋にいらっしゃることになさったので)、*明石の御方も渡りたまひて(別の日には明石御方もお見えになって)、*心深げにしづまりたる御物語ども聞こえ交はしたまふ(信心深そうに物静かなお話し合いを交わしなさいます)。 *「しばらくは」は注に<「しばらく」は「平安時代、漢文訓読体に使われ、女流文学では一般に「しばし」を使ったが、鎌倉時代以後、区別が失われた」(岩波古語辞典)。>とある。注の主旨は分からないが、「しばし」が<その場での少しの間>であるのに対して、「らく」の持続性が「しばらく」という言い方に<一時的だが一定時間・期間>を示させているような語感だ。此处でも<「暫く」=当面=差し当たっての数日>を示している、と読んで置く。また、「しばらくは」の「は」という係助詞は「しばらく」という一定条件を特に限定して何かの意図を示す、という言い方になっていて、その意図とは<此处に「おはす」ことにする>という紫の上の意志を示す文意、なのだろう。 *「明石の御方も渡りたまひて」は、語りのテンポ感からは<翌日>みたいな気もするが、其処までは断定し難いので<別の日>にして置く。 *「心深し」は「心浅し(思慮が浅い、軽薄だ)」の対語だとすれば<思慮深い、慎重だ>くらいの意味になりそうだが、是は下の「上は御心のうちに思しめぐらすこと多かれど」に繋がる文のようなので、下文の文意に照らせば、特に紫の上が、だが、明石御方も年なので、互いに死生観を感じて仏教への帰依を深く思った、みたいなこと、と読んで置く。

[第六段 紫の上、匂宮に別れの言葉]

上は、御心のうちに思しめぐらすこと多かれど(紫の上は御内心ではお考えになっている事が多くあったが)、さかしげに、*亡からむ後などのたまひ出づることもなし(然も物知り顔で仏典にある死後の世界についてのお話しなどを口になさることはありません)。 *「なからむのちなど」は注に<『完訳』は「紫の上は、遺言したいが、死期を予知して冷静にふるまうのを、女らしからぬ態度として避ける」と注す。>とある。「さかしげ」は<冷静に振舞うさま>とは思えない。そも、紫の上には遺贈できる資産などほぼ無い、だろうに。しかも、現世未練を断つために納経法会までしたというのに、それに先立つ身辺整理ならまだしも、法会後の邪念とあっては、あまりに見苦しい。「さかしげ」は<利口ぶる>であって、女ながらに仏典に通じているのが<身の程知らずの浅ましさ>に見える、のを避けた、のだろう。「亡からむ後など」は内心事なので敬語が無い、のではなく、個別の死ではなく、一般概念としての<死生観>だから敬語が無い、のだろう。

ただなべての世の常なきありさまを(ただ世間一般の世の無常を示す出来事を)、おほどかに言少ななるものから(おっとりと言葉少なながらも)、あさはかにはあらずのたまひなしたるけはひなどぞ(単に表面的な噂話ではなしに全てが因縁話めくことなどは)、言に出でたらむよりもあはれに(教条を言葉になさるよりも、如何にも御自分でお考えになった風で)、もの心細き御けしきは(物寂しげな上の御心中は)、しるう見えける(はっきり感じられます)。

宮たちを見たてまつりたまうても(御孫の宮様方を拝し申しなさっても)、

「おのおのの御行く末を(それぞれの御将来を)、ゆかしく思ひきこえけるこそ(幸多かれと願い申しますのも)、かくはかなかりける身を惜しむ心のまじりけるにや(このように余命が短そうな自分の身を惜しむ気持が混じっての慈しみでしょうか)」

とて、涙ぐみたまへる御顔の匂ひ(と言って涙ぐみなさる上のお顔の表情は)、いみじうをかしげなり(とてもお優しい)。

「などかうのみ思したらむ(なぜ母上は死ぬことばかりをお考えになるのだろう)」と思すに、中宮、うち泣きたまひぬ(とお思いになると中宮は泣き出してしまいなさいます)。

ゆゆしげになどは聞こえなしたまはず(上は深刻ぶった風になどお話しなさらず)、ものついでなどにぞ(ものついでのようにして)、年ごろ仕うまつり馴れたる人びとの(長年仕えて親しくしている女房たちで)、ことなるよるべなういとほしげなる、この人、かの人(目ぼしい親戚が無く気懸かりな誰その何人かについて)、

「はべらずなりなむ後に(私が死んだら)、御心とどめて(気に掛けて)、*尋ね思ほせ(雇って遣って下さい)」 *「たずぬ」は<求める=求人する=雇う>。

などばかり聞こえたまひける(などとばかり明石御方に頼み申しなさっていました)。

*御読経などによりてぞ(中宮の公務である季節ごとの国家安泰を願う読経法会などの準備があるので)、*例のわが御方に渡りたまふ(数日後には、紫の上は普段の自分のお部屋にお戻りなさいます)。 *「御読経(みどきやう)」は注に<季の御読経。中宮主催の催し。中宮里邸退出の折には里邸で行う。>とある。明示する。また、段替えは此処からが相応しいように見える。で、紫の上が「例のわが御方に渡りたまふ」たのは、数日後の事なのだろうと見当する。 *「例のわが御方に」は注に<紫の上は西の対に戻る。>とある。

三の宮は、あまたの御中に、いとをかしげにて歩きたまふを(三宮が多く御孫様方の中でも特に可愛らしく歩きなさるので)、御心地の際には(紫の上は御気分の良い時には)、前に据ゑたてまつりたまひて(前にお座り頂き申しなさって)、人の聞かぬ間に(女房たちが聞かない間に)、

「まろがはべらざらむに(私が死んだら)、思し出でなむや(思い出してくれますか)」

と聞こえたまへば(とお聞き申しなさると)、

「いと恋しかりなむ(とても寂しいです)。まろは、*内裏の上よりも宮よりも、*婆をこそまさりて思ひきこゆれば(私は御所の帝や母宮よりもお婆様が一番好きなので)、おはせずは、心地むつかしかりなむ(いらっしゃらないと厭です)」 *「内裏の上(うちのうへ)」は父帝、「宮(みや)」は母宮の明石中宮を指す、と注にある。三の宮から見て当然の関係認識だが、父帝や母宮をこういう呼び方をしていたのか、と覗き見る思い。是は当時の読者も、本当に帝の側近でもない限りは、多分そんな風には呼ばせているんだろう、くらいは見当がついても、実際に如何だったのかは、此処で初めて知る人も少なくなっただろう。 *「婆」は注に<「婆」は祖母紫の上をさす。『集成』は「「はは」は古くから澄んで読むが、祖母の意であろう」。『新大系』は「幼児語に、祖父・祖母を「ぢぢ(爺)」「ばば(婆)」と称したろう、と推定しておく」と注す。>とある。ローマ字読みは「ばば」としてある。三の宮は数え年で五歳ということだが、夏生まれだろうから、この四月で満年齢でも四歳過ぎではありそうだ。

とて(と答えて)、目おしすりて紛らはしたまへるさま(目をこすって涙を紛らしなさっている姿が)、をかしければ(愛らしいので)、ほほ笑みながら涙は落ちぬ(微笑みながらも上は涙をこぼします)。

「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて(大人になったら此処に住んで)、この対の前なる紅梅と桜とは、*花の折々に、心とどめてもて遊びたまへ(この対の前庭にある紅梅と桜とは花をつける季節毎に毎年心に刻んで花見をなさいませ)。*さるべからむ折は、仏にもたてまつりたまへ(お葬式の際は仏前にも供えてね)」 *「花の折々に心とどめてもて遊びたまへ」は心に染みる名調子だ。多義に解釈も出来そうだが、この言葉通りに受け止めるだけで十分に人生の豊かさを知らせる言い方に見える。紫の上は素直な人柄が理想的に設定されている所為からかも知れないが、「大人になりたまひなば此処に住みたまひて」という言葉にも素直に三の宮の幸せを願う気持が伝わって来て、二条院だから、六条院ほどの特別さではなく、儉しくはないだろうが、普通の春の生命力を素直に喜ぶ上の人柄が偲ばれて、恐らく作者にも似通った場面の実体験がありそうな、説得力を感じる。 *「さるべからむ折」は<それが似つかわしくない場合=不幸=葬式=法事>みたいな言い方だろうか。注には<「仏」とは、暗に自分の供養のために、という意。>とある。冗談半分の言い方だが、三の宮は子供ながらに、その半分の意味を感じ取った、という場面描写なのだろう。

と聞こえたまへば(と上がお話しなさると)、うちうなづきて(三の宮は頷いて)、御顔をまもりて(上の御顔を見守って)、涙の落つべかめれば(涙が落ちそうになったので)、立ちておはしぬ(立ち去ってしまいなさいました)。取り分きて生ほしたてまつりたまへれば(上は取り分けて手許でお育て申し上げなさいましたので)、この宮と姫宮とをぞ(この三の宮と一の姫宮とを)、見さしきこえたまはむこと(お世話の途中じまいにし申しなさるのを)、口惜しくあはれに思されける(残念で悲しく思われなさいました)。